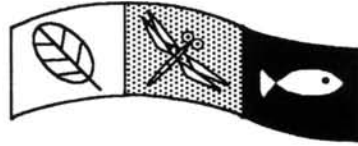
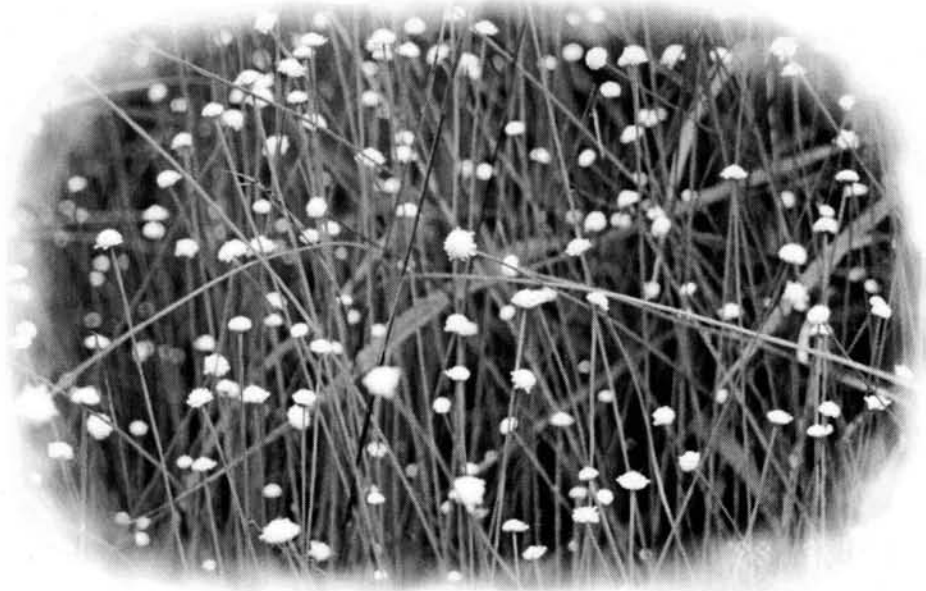


# Rio



リオ ～ 豊田市矢作川研究所 月報 ～ No. 17



籠川上流部のシラタマホシクサ  
(1999年9月11日 藤井泰雄氏 撮影の写真をアレンジ)

## 40年前にご招待

中田 良政

ここは高知市長浜の宇賀と言うところである。ここには宇賀川が流れていた。豊田市で言うならば御船川程度である。

この川は四季折々の顔を持っていた。その40年前にご招待しよう。

この川は高知市の展望が良いことで市民がよく登る鷲尾山を源としている。山に沿って曲がりくねりながら下ってきて、我が家のあたりでは田んぼの中を時には直角に、また緩やかに曲がりながら下り本流の長浜川に注ぐ。

南国高知とは言え冬の寒い時は瀬場では氷がはる。新聞配達に行く薄暗いときにはまだ張ってい

ないが、帰ってくるときには氷が成長を始めるのを目撃できたのである。学校に行くころにはしっかりと張っており、ここでの遊びは石でこの氷を割っていくのである。スカッとするのである。

この冬の時期に川の土手はきれいに焼かれ、雑草はなくなり黒い土手になる。その黒い中に彼岸花やヨモギの緑が美しい。このヨモギは正月の押し餅や館ころ餅に使われる。

3月も終わるころ春の訪れを知らせるようにツクシが顔を出し始める。暫くすると川には真っ黒いオタマジャクシや小鮒が元気よく泳ぎ始めるのである。このころから私たちは川に入り始める。

手には網を持ちバケツを持ってである。その結果家の水槽がにぎやかになるのである。

同時に竿作りも始まり、畑の横の真竹を切り、あのよさこいにも歌い込まれた御置瀬（みませ）に天蚕糸（テグス）や針を買いに行く。余談だが江戸のころこの天蚕糸を考えたのが、この御置瀬の漁師である。

初夏の訪れは川の上を舞い始める平家螢で始まる。上流のあたりでは源氏螢が清水のにじみ出るところを幼虫がお尻を点滅しながら登っていくのが見られる。

真夏になるとここはプール代わりとなるが最初から泳ぐわけではなく、この川は石組みで護岸しているのであちこちの隙間にフナやウナギがいるのを獲っているのだが、熱中して裾や袖が濡れ始めるとどんどんエスカレートし最後は泳ぐのである。

さて、川の獲物かというとメダカ、フナ、カジカ（我々はオバアと呼んでいたが）、ナマズ、ウナギ、下流部はシジミも少しだが採れた。この中でウナギだけが食料となった。これは非常においしかった。水が澄んでおり全く泥臭くないのである。しかし採ってきてからが大変であった。あまりにも元気であるから料理が大変なのだ。七輪に火をおこしタレを作り焼くのである。

ある時から、突然オイカワが見られるようになった。あの雄の美しさに引かれ捕獲を試みるが、奴等はすばしっこいのでなかなか獲れない。すると獲る方法を従兄弟が考え出した。それは網を水の中に入れて左右に動かして追っかける

のである。

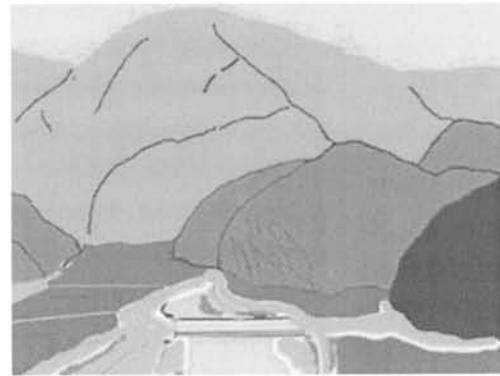
秋には台風が来る。この小さな川は氾濫する。稲は水をかぶって大変だが、なぜかそのダイナミックな光景が好きだった。そのあと川沿いの田には大きなフナが泳ぎ回っているのである。

晩秋になると何処からか長い竿を持ったおじさんが出てくる。彼は竿の先に殿様蛙の皮をはいだ物を何匹か縛りつけている。それをモクズ蟹（我々はツガニと呼んでいる）の顔先に持っていきと蟹はそれをハサミでつかむ。そのようにしてこの蟹を捕っているのである。珍味らしいが食したことはない。

以上が40年前の川の四季であるが、今この川はない。厳密に言うところあるのだが、我が家の少し上流から三面張りの真っ直ぐな川へと20年ほど前に姿を変えた。

救いはその川にまだ澄んだ水が流れ、ウナギも遡っていることで、誰かが竹筒を入れてこれを捕っていることである。

（なかた よしまさ、矢作川を筏で下る会）



（イラスト：筆者）

## 土木技術者は文学的デリカシーを

— 近自然技術者の「語録」から④ —



新見 幾男

今から4年半ほど前の記念講演の記録を読んでいる。日付は1995年3月17日、場所は豊田産業文化センターである。

この日、豊田市矢作川環境整備計画検討委員会が4年間の審議を終え、当地での近自然型川づくり

の指針となる報告書を採用した。そのあと、当時の建設省豊橋工事事務所長の梅谷内信夫氏が「川と人とのかわり」と題して記念講演し、パーティーも開催された。矢作川環境整備計画検討委員会の事業終了と豊田市矢作川研究所の発足（1993

年)の両方を祝う、両団体共催の記念事業だった。

この講演で梅谷内所長は「これからの河川行政には、治水・利水・環境のバランスが大切だ。治水・利水は土木技術者の“右の脳”で判断できるが、環境には住民参加で対応するしかない」と強調した。そして、作家の司馬遼太郎が「日本土木学会創立八十周年講演会」(1994年11月)で述べたことばを、次の通り紹介し、約一時間の講演の結びとした。

「土木というものは、本来人民に幸福を与えるためのものである。土木はほかの学問や技術と違って、国家とか行政あるいは社会の中心に座ってしまうので、技術を追求するのみでは現実に生きてこない。

土木は社会という人間の体のような組織の中心にあるものだから、環境の問題を考えないと成立しない学問である。人体と同じ生命体である社会の中の外科手術を施すものだから、土木をやる人は社会科学とか、文学的デリカシーのある教養の固まりのような人でなければならない。

そうでないと、社会の味方だったこの学問が社会の敵となるような、非常にきわどい時代にさしかかっている。」

この講演の記録を私は読んでいないが、その趣旨は、土木技術の巨大な環境破壊力を環境創造に使おうという近自然時代は、土木技術者に社会科学や生物学の知識を要求するだけでなく、文学的教養も要求している、というものだっただろうと想像している。

司馬遼太郎の「土木技術者論」を紹介した梅谷内信夫所長自身が河川土木技術者であり、聴講者も県や市の土木技術者が多かった。会場の後列から写真撮影していたので、聴講の人々の表情を知ることができなかったが、講演が終わった一瞬に静寂があり、それから拍手がわいた。

豊田市矢作川環境整備計画検討委員会という組織は、建設省豊橋工事事務所の要請にもとづき、豊田市が設置したものだ。当時の豊橋工事事務所副所長の杉浦宏氏が何度も豊田市役所を訪れて、加藤正一市長と会談し、そのあと設置方針が明らかにされた。

この矢作川環境整備計画検討委員会というのは、

全国に先がけて一本の河川の環境問題を“土木技術”の面から再検討しようとした一種の審議会であるが、あのかのときの加藤市長の決断がなかったら発足していなかったと思う。そして同検討委員会の長い審議の過程で、一本の河川の環境を生物の“生態研究”の面からも継続的に考える必要があるという空気が育ち、豊田市矢作川研究所がスムーズに誕生することになった。

今思い返してみると、この二つの組織は当時の土木技術者たちの協議の中から誕生したというよりは、市長の文化論的直感が産み落としたものだと思える。今後の土木技術者論を考える上で大変に示唆的なことだ。

豊田市矢作川環境整備計画検討委員会の構成メンバーは、建設省豊橋工事事務所、愛知県土木部河川課、同豊田土木事務所、豊田市、明治用水土地改良区、枝下用水土地改良区、矢作川漁業協同組合、豊田市自然愛護協会、矢水協、中部電力、名古屋大・豊橋科学技術大の研究者などの、矢作川関係団体を網羅していた。その審議結果である「報告書」自体は今は書庫の中で居眠りしているようだが、審議が4年間の長期にわたったため、その過程で矢作川の現場において近自然型改修の各種公営実験事業が推進され、その現場の実物の成果が今も輝いている。

また審議過程の初期には、豊田市が同検討委員会の実務担当者11名からなる欧州近自然河川工法



1995年、建設省豊橋工事事務所の梅谷内信夫所長が豊田市で講演し、司馬遼太郎の「土木技術者には文学的デリカシーが必要」論を紹介した。

調査団をスイス・ドイツへ派遣した。その際に、日本の近自然工法の開祖的存在である西日本科学技術研究所の福留脩文氏が調査団長を引き受けてくれ、福留氏の人脈で、欧州の近自然型河川改修の現場を見られただけでなく、そういう技術を産んだ欧州の分厚い文化史、技術者たちの哲学にも触れることができたように思う。

視察中に全く驚いてしまったことだが、現地案内役の土木技術者たちが、100年も前の改修工事の図面をもってきては、最近の工事現場と比較して説明してくれた。役所内の書類管理システムが良く整っているのだ。そして書類にならない現物が河川博物館に収められてあった。

あの国の土木技術者にとって、近自然工法とは、河川管理技術史の分厚いファイルの上に新しく重ねられた一枚の図面にすぎないのかもしれない。「自然界に直線はない」という哲学めいた土木技術者たちの表現も、その分厚いファイルの中から自然に産まれたものかもしれないと思った。

彼らが新しくつくった散策路は、いつも緩やかにカーブし軽く起伏していた。小川も直線化を極力避けてつくり、瀬と淵を意識的に連続配置していた。それは生物生息空間への配慮だけではなさそうに思えた。

あの少年期の坂道への記憶、川の深い淵への記憶を大事にしようとする純情な気分や文化的伝統を、土木技術者たちが持っているに違いない。だからファイルが分厚くなり、管理システムが整え

られたのだと思われた。

欧州の土木技術にも、直線化で人の記憶を大規模に消した過去がある。しかし、その過去への反省が日本より早く、かつ徹底していた。「自然界に直線はない」という哲学的格言は、欧州の土木技術の自戒であるかもしれない。梅谷内信夫氏が4年前の講演で紹介した「土木技術者には文学的デリカシーが必要」論に、一脈相通じていそうなのである。

その水準へ矢作川の「近自然」の思想と技術を高めるのは、欧州の土木技術の“知恵の実”を食べてしまった人間の今後の大仕事であろうが、ただ、官庁の土木技術の現実には、設計を自分でせず民間に委託発注する世界に変わり、技術者の力量と誇りをひどく衰弱させてしまった。設計の面白さを知らない世界からどんな「近自然」の発想が生まれ得るのだろうか。

非技術系の人々の広い視野、つまり一般常識で「近自然」を文化の水準の問題としてとらえ直し、一般人が土木に口出しできる仕組みをつくってはどうか。技術社会のトップには、当面、非技術系の一般文民が就任したほうが良いのかもしれない。そこから土木技術再生の道が開けないだろうか。このシリーズのテーマから少し離れてはいるが若干の関連はありそうな、私の提案である。

(にいみ いくお、豊田市矢作川研究所  
事務局長・矢作川漁業協同組合 専務理事)

## 俺と矢作川

小沢 康彦

ひょんなことから、今年から私は矢作川研究所の陸生昆虫の調査に同行させていただくこととなった。そういうわけで、ここから私と矢作川との関係は非常にまったりとした形で始まっていったのである。

私の出身は矢作川の支流の矢作古川の河口にある幡豆郡吉良町であるが、家からは海のほうが近く、川なぞに興味などこれっぽっちもなかった。それが今までの矢作川に対する

思いである。第一、この川では、鵜が呑み込んだ鮎を無理矢理吐き出させて喜ぶという観光事業があるわけでもなし、修行僧が集団で沐浴してるわけでもなし、無謀なキャンパーが濁流に流されたわけでもなし、鳥人間たちが手作りの飛行機で飛距離を競っているわけでもなし（←それは湖）、これといった特徴があると思っていなかったからである。

しかし、実際に矢作川に身近に接してみる



と、この考えは違っていた。というよりもむしろ、川を「大きな桃がドンプラコと流れてくる場所」などといった一側面からだけ眺めてはいけないと気付かされたのである。増水することもある、濁水の時もある。そしてそこには川を利用している様々な人々の生活の場がある。このような一見普通のことでも、実際肌で感じてみなければ、幽体離脱して自分の死体を眺めている時になってもわからなかっただろう。

この夏の雨で矢作川の水量はかなり多かったようだ。大雨が降ってしばらくして私が研究所の皆さんと調査に行った日も、水も多く、流れは激しさを増していた。それでもピーク時よりは水量はだいぶ減っていたらしく、「この前なんて、向こうの駐車場のあたりまで水が来ていたんですよ！」と研究員の方がやや

興奮気味に語っていた。川沿いのヤナギの木には上流から流れてきた木の枝、流木、ビニール袋、空き缶、空き瓶、長靴、古タイヤ、電気冷蔵庫、お父さんのパンツ（一部記憶に混乱あり）などが引っ掛かっている、その流れの激しさを物語っていた。川の変化に驚かされた瞬間である。

このような多様性を見せる矢作川とその周囲の自然を人との調和を守りながら保全していこうという豊田市の皆さんの姿勢に、私が感銘を受けないはずはなく、止めどなく流れ出る涙を押さえるのに精一杯だった。これからは矢作川のために私にできることがあったら微力ながらご協力させていただきたいと思う今日この頃である。

（こざわ やすひこ、名城大学農学部  
動物学研究室 研究生）



捕虫網による調査を行う筆者



昆虫の誘因餌を入れたコップを埋める筆者

